

仙人通信 82 三笠山 (1450m位)

三笠山は両神山と御巢鷹山の間位置する諏訪山 (1549m) の一部で、普覚上人が三笠山刀利天王を勧進した山とし、山岳信仰のメッカであった事で有名だそう。群馬県道 45 号線の南牧村と上野村を結ぶ湯の沢トンネルが完成し、西上州の最奥にも容易に行ける事を知り、計画した。楢原トンネル手前、左横の林道を 15 分程車で走ると三笠山神社の広場である。諏訪山山頂 (300 名山) までのピストンを考えたが、広場への到着が遅くなり、諏訪山手前の三笠山で折り返す事も念頭に入れてのスタートだ。神社裏手にある堰堤を乗越して、瀬音を聴きながら斜面に刻まれた登山道を 15 分程進むと赤いトタン葺きのお堂に着く。山の斜面に刻まれた 15cm 程の幅の登山道はしっかりと枯れ葉に埋もれ、油断すると滑る。スタンスを確保しながらのゆっくりとした登りが続く。沢から離れるにしたがい瀬音も小さくなり、腰に付けたカーウベルと枯れ葉を踏む靴の音のみの世界である。入山者は小生「1 人」のみを実感する。赤ゲラが大きなドラムを叩いて小生を出迎えてくれた。静かさが破れ、何だか嬉しさが込み上げ、ケラの姿を探した。更に九十九折の急斜面を 10 分ほど進と、次のお堂である。更に右手に折れ、木葉に埋もれた登山道は続く。登り始めから 40 分で尾根に出る。

目の前の諏訪山を指す道標の上に、雪で化粧した浅間山が梢越しに勇姿を覗かせる。尾根が低い性もありアセビや水楢の尾根路からの展望は、浅間山以外、周囲の西上州の山波のみだ。数年前の嵐で屋根が吹き飛んだのであろう刀利天王の板碑が剥き出しで祭られている。朽ち落ちた屋根を拾い上げ板碑の近くに置いて手を合わせた。ところで刀利天王とはヒンズー教の大梵天・四天王天等と並ぶ六欲天の神様だそう。小倉山を過ぎ 40 分ほどで「八海山提頭羅咄神王堂」と書かれた三笠山遥拝所のお堂に着く。両側に 100Φ×200 程の赤く錆びた鉄製の鐘が、鎖で木に 2 つ吊り下がっている。小石で叩くと以外にも澄んだ音色で神々しい。ガイドブックに「ヤツウチゲラ」(三笠山) とあり、カナ書きであり意味を理解したく、数名の地元の人に尋ねてみたのだが、呼び方さえ知らない知名度の世界だ。鐘を叩いて初めて言葉の意味が理解できた？。道はお堂の横の鎖とアルミの梯子で、尾根の北側を巻き一旦下る。尾根にある大きな岩のため、濡れた落ち葉で滑る北側の山肌を巻き進む。15 分程で尾根に戻り進と、ブナ・コナラ・シラビソ等の西からの尾根道「浜平登山口」と合流する湯ノ沢の頭である。北側の巻道を進むと麦藁帽子を 3 つ重ねた様な三笠山の山頂が見える。10 分程でトタンが壊れた弘法小屋である。尾根に戻るとアルミ製の 2 段の梯子が目前に見えてくる。2 個の梯子を繋いだ物が二基置かれている。その上は鎖で岩を乗越し、ブナや石楠花の根を頼りに三笠山山頂岩体の北側をトラバースする。更に 10 段程の鉄製の梯子を登り、西側から這樣にして、三笠山刀利天王を祭る堂がある小さな山頂に辿り付く。登り初めて丁度 3 時間であった。三笠山の岩体は三波川石に似た変成岩である。この諏訪山一帯は両神山まで続く秩父層で神流川に沿って、小鹿野まで続く白亜紀の山中地溝帯を挟んだ岩体だそうである。山頂からの展望は、目の前の諏訪山左手から帳付・両神・赤久縄・笠丸・白い浅間・烏帽子・長野国境の山・白い蓼科と 360° であるが遠望は利かない。日航機墜落の御巢鷹山は、残念ながら諏訪山の陰で見えない。展望のよいと言われる諏訪山への往復 1 時間は、帰路を考えるとやはり断念だ。帰路、湯ノ沢の頭の方岐近くで鹿の親子が尾根を越す姿を見つけ、しばし静観した。芽吹き前の山路での餌を求める姿に哀れみと割り切れない思いで一杯になった。(h 2 1. 4. 7)

三笠山山頂の刀利天王の祠



山頂近くに掛かる梯子



浅間山

